

虐げられた無能の姉は、
あやかし統領に溺愛されています3

木村真理 Mari Kimura



アルファポリス文庫

西園寺初音

高雄

白猫

「無能」と虐げられてきた少女。高雄の求婚を受け、婚約者としてかくりよに移る。かくりよのあやかしの統領。無類の力を持つ鬼神。初音を導く。聖獣・白虎ではないかとも言われている。

【側近】

雪姫

高雄の側近で目付け役。見た目は白髪の少女だが、七百歳を超えた龍。

樹莉

高雄の側近。緑色の髪が豪奢な鬼神の美女。湖苑と婚約中。

湖苑

高雄の側近。藍色の髪を持つ鬼神の青年。樹莉と婚約中。

火焰

高雄の側近で幼馴染。赤色の髪を持つ鬼神の青年。

【その他のあやかし】

・元老

紫水、昆明、崔亮

・花葵

元老・崔亮の孫娘。初音が高雄の婚約者であることが不満。

・花葵の養い家の娘

牡丹、春紅

・アーサー

ドラゴン族の王弟。花葵に好意を示している。

・近衛

笹沖、桃香、陽太、重光、菖蒲

・侍女

小梅、松野、竹良

第一章

二月の冬の朝は、暗く、寒い。

それはうつしよと世界を隔てたくりよでも同じだった。

寝台から身を起こすと、ひやりとした空気が頬を撫でる。初音^{はつね}はゆつくりと瞬き^{まばた}をひとつする。そして、さっと寝台から下りた。

十七年間過ごした家で、初音はあやかしを操る力を持たない「無能」の娘として虐げられ、使用人以上に早朝から夜遅くまで家の用事を言いつけられてきた。目を覚ましてすぐ動くことに、体が慣れている。

用意されていた水で顔を洗い、ささっと髪に櫛^{くし}を通し、着物を整え、鏡を覗^{のぞ}き込む。
(よし)

鏡に映るのは、ごくふつうの十七歳の娘だ。

日に焼けて浅黒い肌。ぎよろぎよろして気味が悪いとよく言われた大きな目は、かくりよで暮らし始めたこの一か月弱、たっぷり栄養を摂^とっているおかげで「ぱっちり

とした目」だと言われるようになった。ばさばさだった髪も、丁寧に入入れをしているおかげでつややかになった。けれども、全体の造作は地味で、世間一般で「かわいらしい」とか「美しい」と評されるほどではない。

そんな己を、初音は正しく理解していた。と同時に、そんな自分かわいくて仕方ないと思っている者がいることも知っていた。

その者こそ、初音の婚約者。あやかしの統領である鬼神の高雄だ。

生まれてから一度も、誰からも愛されたことがないと思い、この先の日々にも暗い予想を抱いて暮らしていた初音の前に、高雄が現れた。

女学校の藤棚を大きな扉に変えて突如うつしよに現れた高雄は、初音と目が合うやいなや、初音のいる教室へと転移し、先生や同級生の見守る中で、初音に求婚した。

高雄はその強い靈力で先生や同級生たちを自然と跪かせ、学長や皇族をも畏れさせるほど強い鬼神だった。そして、かくりよの統領として、側近や近衛のあやかしたちを引き連れており、全員が居並ぶ様は決してかなわぬ存在としての威容を見せつけていた。そのうえ、高雄は見たこともないような伶俐な美貌の持ち主だった。

初音は自分には過ぎた結婚相手だと思いつつも、まっすぐに自分に注がれる高雄の優しさや好意を示す言葉に触れるたび、彼に惹かれていった。

そして、これまで自分を虐げてきた家族と決別し、かくりよに移り住むことになっ

たのだ。

初音は、そつと目を閉じた。そして、深く静かなため息をひとつ落とし、また鏡の中の自分へ視線を戻した。

新しく始まったかくりよでの生活も、平坦なものではなかった。

高雄の初音への溺愛は変わらなかつたし、高雄とともにうつしよに来ていた側近である雪姫、火焰、湖苑、樹莉や近衛たちは変わらず優しくかつた。

けれど統領が、うつしよからとつぜん連れ帰った人間の娘と結婚すると宣言したことに、不満を持つあやかしも少なくなかつた。高雄の両親が初音たちの婚約を寿ぐ宴会を開き、貴重な「輝石」を大量に祝いの品として贈ってくれたおかげで、表面的には沈静化したのが、依然として初音を認めない者もいる。

その筆頭が、高雄のお目付け役「元老」のひとり、崔亮の孫娘、花葵だ。

初めて顔を合わせた時から初音を認めないと言っていた花葵は、初音の婚約を寿ぐ宴の場で初音を面罵し、高雄の怒りを買って、処罰を受ける……はずだった。けれど初音が不思議な白猫の力を借りて、花葵が怒鳴り始めるよりも前に時間を戻したので、今も変わらず過ごしているらしい。

白猫。初音は、自分に思いがけない力を与えてくれたうつすらと銀の模様のある子猫を思い出し、またひとつため息をついた。

初音を導き、「時を戻す」という大きな力を発揮させた白猫が、ただの猫ではないことは明らかだった。長い時を生きる雪姫によると、その猫は「白虎」という聖獣かもしれないそうだ。かくりよの「白虎」は、いにしえの統領と同じほど強い霊力を持つ人間の娘「統領の対の娘」が、自身の余った霊力で作り出したという伝説上の生き物だ。雪姫たちは、初音の霊力ならば「白虎」を作り出しても不思議はないというのだ。

けれど初音は、期待されたような力は、その一件以外発揮できていない。今も毎日真面目に訓練をしているが、ごく簡単な術も使えないままだ。そのことに対して、焦りはある。このままかくりよでも「無能」のまま過ごすのは、絶対に嫌だった。

けれど、それでも。もしこのまま初音がなんの力も持てない「無能」であっても。高雄や彼の周囲の人々は、初音を見限ったり、虐げたりしないことは確信していた。特に婚約者である高雄は。

高雄が最初にうつしよにいた初音の存在に気づいたのは、初音が高雄に匹敵する大きな力を持っていると思ったからだ。にもかかわらず、自分の力だけを求めていると疑わず、初音が高雄の愛情を信じられるのは、高雄がいつもたくさんの好意を、言葉で、眼差しで、伝えてくれているからだ。

本当に、高雄の愛情はあふれんばかりのもので、生まれてからずっと家族にも愛さ

れることのなかった初音の餓えた心さえ、潤して、満たしていく。

それは本当に幸せなことだ。けれども、その愛情に困ることもある。

そのひとつが、これだ。

初音は確信を持って、そっと部屋の扉を開けた。そしてまだ薄暗い廊下の向こうへと目をやり、息を呑んだ。

（ああ、やっぱり。今日もいらっしやる）

初音の寝室を出てすぐの廊下の奥に、黒い人影が見えた。このかくりよの統領であり、初音の婚約者である高雄だ。

廊下に卓を持ち込んで書面を確認していた高雄は、初音が扉を開けたことに気づいたのだらう。初音へ視線を向け、にこりと笑う。

「おはよう、初音。よく眠れたかい？」

高雄が笑みを浮かべると、整った顔があまく溶ける。特に初音を見つめる黄金の瞳は砂糖をかけたはちみつのように、初音の心まであまく染め上げる。

「おはようございます、高雄様」

高鳴る心臓を抑えながら初音が言うのと、高雄は滑るように初音のほうへ歩いてきた。そして初音の顎に手を添え、初音の顔を覗き込んで微笑む。

「うん、よく眠れたようでよかった」

「ありがとうございます」

至近距離で見つめられ、初音はたまらず目を伏せた。

高雄はそんな初音を慈しむようにすると頬を撫で、手を離す。

初音は知らず知らずのうちに小さくなっていた呼吸を取り戻すように、大きく息を吐いた。まだ、心臓が早鐘を打っている。

こうして高雄とともにいるようになって、もうすぐ一か月になろうというのに、高雄のあまやかな言動に慣れることはできなくて、高雄の言葉のひとつひとつ、視線や挙動のひとつひとつに、心臓が痛くなる。

けれど今日は、こうして翻弄されてばかりではいけない。

初音は胸に手を当てて高鳴る胸を落ち着かせると、きゅつと唇を噛み、上を向いた。すると高雄と視線が合い、にこりと微笑みかけられる。

「あ、あの……。高雄様！」

「ん？」

ひるみかけた初音を、高雄は促すように優しく見つめた。それに力を得て、初音は続ける。

「お願いがあるのです！　こんなふうに、廊下で眠るのはやめ、夜はご自身のお部屋でおやすみください！」

一息に言って、初音はほっと息をついた。

言えた。

これを、昨日からずっと言わなくてはいけないと思っていたのだ。

昨日。いつもより早い時間に目を覚ました初音は、特になんの考えもなく、ふらふらと廊下へ繋がる扉を開けた。そして、見たのだ。まだ薄暗い廊下の隅で、高雄が卓に伏せるようにして眠っているのを。

心臓が止まるかと思った。

驚きすぎて、初音は眠る高雄の傍らにいた近衛のひとりに促されるまま部屋に戻り、もう一度寝台に潜り込んでしまった。

侍女たちが初音を起こしに来た時には、もう廊下に高雄はいなかった。

初音は、先ほど見たものは夢だったのかと思い、おそろおそろの侍女に「先ほど廊下で誰かに会わなかったですか？」と尋ねてみた。すると侍女たちはくすくす笑いながら、教えてくれた。

「あら。高雄様はどうとう見つかってしまわれたのですね。十日前、初音様のお部屋で看病することを御典医に禁止されたでしょう？　あの日から、夜になるとこのお部

屋の前の廊下でああして過ごされていたのですよ」

いちばん年嵩の侍女の松野が微笑ましそうに言うとおしゃべり好きの小梅が楽しそうに続けた。

「お医者様はもう大丈夫だとおっしゃっていましたが、どうしてもまだ心配だと……。ならばわたくしたちが代わりますとお伝えしても、自分が初音様のお傍にいたいのだと言って譲られなかったのです」

「そんな……」

初音が絶句すると、初音の着替えの用意をしていた竹良は不安げに眉をひそめた。

「あの、やはり初音様に早々にお伝えしたほうがよかったですか。その前の一週間、高雄様がつきつきりで看病されていたこともあって、初音様もご不快とまでは思われないかと考え、高雄様の命に従ってしまいました……。相思相愛の婚約者であっても、こっそり夜中の廊下にいるなんてお嫌でしたでしょうか」

しおれたように竹良に言われ、初音は大きく首を横に振った。

「嫌だなんて。私が高雄様に思うわけがないわ。私が宴で倒れたことでそれほど高雄様を心配させたのかはわかっているし、高雄様が私を案じてくださっていることもわかってるもの」

初音は慌てて、言葉を続けた。

「そうではなくて、ただ高雄様のお体が心配なの。その前だって、高雄様は私の看病のためにほとんど眠っておられなかったし、今だってあんなふうに廊下で座ったまま眠るなんて。とてもお体が休まるとは思えないわ」

初音は、今朝高雄を見た時からずっと不安だったことを口にした。

けれど侍女たちは思いがけないことを聞いたとばかりに目を丸くし、微笑んだ。

「まあ。初音様。高雄様は統領でいらっしゃるのです。ひと月やふた月、眠らなかつたとしてもお疲れになることなんてございません」

侍女たちはそう言って、初音がどれほど心配だと言っても「大丈夫です」と言うばかりだった。それは近衛たちも同じだったので、初音はそれ以上にも言えなかったのだった。

けれど考えれば考えるほど、やはり高雄の体が心配になり、今日、こうして早起きして、高雄に直談判することにしたのだ。

吐く息が白くなるような、こんな寒い中、毎晩廊下で眠るなんて、高雄の体にとつてよいことであるはずがない。

昨日は侍女や近衛に止められて、自分のほうが間違っているような気持ちになった

けれど、心配にならないはずがない。

大丈夫だ。高雄は、たいいていの初音の願いは聞いてくれる。時々、謎の理由で断られることもあるけれど、自分の寝室で寝てほしいなんて、ごくごく当たり前のお願いだ。

初音は、もう高雄が「わかった。今日の夜は、自分の部屋で休もう」と言ってくれと疑ってもいなかった。

けれど、初音の願いを聞いた高雄は困ったように微笑んだ。

「初音の願い事はなんでも聞いてやりたいが。それに関しては難しいな」
すまない、と優しい口調で、けれどきつぱりと高雄が言う。

「な、なぜですか……？」

自分の願い事が非常識なことだとは思わない。布団を持ち込んでいるとはいえ、廊下で眠るなんて、体が休まるはずがない。非常時で他に眠るところがないのならともかく、ここは高雄の住まう城、御所城だ。あやかしの統領が代々居住してきた御所城は、その歴史にふさわしく広大で、美しい城だ。そしてその主である高雄は、その中でもいちばんいい場所で眠る権利があるはずだ。決して夜毎、初音の部屋の前の廊下で眠っている者ではない。

それなのに、高雄が廊下で寝ているのは初音のせいだ。

なぜと問いかねながら、初音はそのことを自覚していた。

高雄は、初音を溺愛している。……なぜかは、わからない。初音は特に才能も、美しさも、心の強さも持たないごくありきたりな人間の娘だった。

生まれ育ったうつしよの大統国^{だいていこく}では、あやかしを操る異能に恵まれる侯爵家の長女として生まれながら、なんの才能も持たないがゆえに疎まれて育った。高雄たちは、初音に強い力があると言うけれど、それらしき力を発揮できたのはこれまでたった一度。それもその直後に倒れてしまった。

そんな初音だったが、高雄にはなぜか大層な美少女に見えているらしい。特にいいとは思えない性格も完璧だと言われていた。

高雄が初音の願いを聞いてなお、自室で眠ろうとしないのは、侍女たちが言っていた通り、初音を心配しているからだろう。けれど、心配なのは初音だって同じだ。

初音はもう一度高雄に「今日はご自身のお部屋で眠ってください」とお願いしたが、高雄はうなずくことなく、話は平行線のままで終わってしまった。

「このままでは、高雄様のお体にさわります」

午前中は樹莉の授業時間だったので、初音は今朝の出来事を話して訴えた。

樹莉とあらかじめ同席をお願いしていた雪姫は、そろって目を丸くした。

「おやまあ。てっきり高雄様のやりようが気持ち悪いとかうっとうしいとかいう苦情かと思うたら」

「そんなふうに高雄様につきまとわれても、高雄様のご心配が先にくるなんて。初音様は本当に高雄様がお好きなんですよ」

雪姫と樹莉は、顔を見合わせて笑う。豪奢な美女である樹莉と、清楚な美少女にみえる雪姫が笑い合う姿は一幅の絵のように美しい。

けれどこのふたりは、ただの美しい少女たちではなかった。あやかしの統領である高雄の側近をつとめるほどの実力者で、樹莉は高雄の幼馴染み。雪姫は幼く見えるが七百年を超えて生きる龍族で、高雄が幼いころからその成長を見守ってきた祖母のような存在である。

忠臣としてだけでなく、高雄の身内のように接することを許されているふたりは、今朝の出来事を聞きながら、高雄の所業に呆れつつ、彼が初恋の相手である初音に嫌われはしないかと不安そうにしていた。けれど高雄の体調を心配する言葉ばかりが初音の口から出るので、胸を撫で下ろして微笑んだ。

そんな感心するような樹莉の言葉も、初音には恥ずかしい。頬が熱くなって、うつむいた。

樹莉は真つ白な頬に手を当てて、初音のことを優しい目で見ていた。緑の長い髪がさらりと揺れ、朝の光の中で美しく輝いている。

初音が思わず見惚れてしまうと、雪姫のしのび笑いが聞こえた。

そちらに目を向けると、お人形のように整った顔をしている雪姫は、初音を見て人の悪い笑みを浮かべている。そんな表情をしていても、無邪気でかわいらしく見える雪姫は、樹莉の隣に腰かけると彼女と顔を見合わせて微笑んだ。

けれどその美しく愛らしいあやかしたちは、すぐに笑いを抑えられなくなったらしい。口元を手で隠しながら、笑い出す。

「くくくく。樹莉、そう笑ってやるな。あれでも我らの統領なのだぞ」

雪姫は、笑いをかみ殺そうとしているが、できていない。樹莉などは、もはやきやらきやらと声を上げて笑い出した。

「そうおっしゃいますけど、雪姫だって笑っているではありませんか。だって高雄様ってば、毎日毎日初音様の後を追うかのように周囲をちよろちよろされて。あれではまるで、親の後を追う雛鳥ではありませんか」

「いつも泰然としておられた高雄様が、変われば変わるものじゃの。遅くに訪れる初恋の恐ろしさよ。初音様が、高雄様の重すぎる愛情を受け止めてくださる方で、本当によかったわ」

笑いながら、雪姫はしみじみと言う。初音は、雪姫の目がうつすらと濡れているに気づいた。

金色の目を持って生まれた高雄は、生まれながらにしてあやかしの統領となる生き方を選ばされた。また、これまでは統領の証である金の目は血筋に関係なく表れていたが、高雄は先代統領であった父から統領を継承することになった。親子での統領の継承は初めてのことで、周囲の奇異の目や期待にさらされながらも、高雄は歴代の統領を凌駕する力を発揮し、穏やかで気さくな性質もあり、尊敬と敬愛を集めてきた。けれど一方で、周囲との力の差に高雄が孤独を感じてきたことも、初音は知っている。そんな高雄を、高雄の両親や四天王と呼ばれる高雄の側近たちが案じながら見守ってきたことも。

だからだろう。雪姫や樹莉は、高雄が初音を溺愛することを笑いながらも、その声音も眼差しもあたたかい。

「本当に。初音様が寛容な方でよかったですわ。でも、無理をなさってはいけませんよ。うつとうしいと思われたなら、この樹莉にお伝えいただければ、高雄様にびしつと申し上げますからね」

樹莉は、初音を気遣うように言う。初音は、慌てて首を横に振った。

「うつとうしいだなんて、そんな。そんなこと、思うはずありません。高雄様は、毎

日のように朝も夜も、私のことを見守ってください……。お忙しいのに、このままでは高雄様のほうがまいってしまいます。それが心配なんです」

樹莉と同じようなことを、竹良にも言われたなど、初音は思い出した。

初音にとって、高雄がくれる愛情表現は、嬉しいばかりだった。

まっすぐな好意の言葉も、愛おしげに見つめてくれる瞳も、初音の心も体も大切にしようとしてくれる行動も。

自分が想いを寄せる相手に愛されるのは、誰にとっても幸せなことではないのだろうか。確かに今回のことには困ってしまったが、それも高雄の体が心配なだけだ。それを勘定に入れないければ、初音にはただ嬉しいだけだ。他の人にとっては違うのだろうか。

初音は、特に自分が寛容だとは思えなかった。けれど幼いころから家族にも愛情を与えられないまま育ったので、他の者より愛情に飢えているのかもしれないと思う。

高雄のあふれんばかりの愛情表現は、多くの愛に恵まれてきた者にとっては過剰で息苦しく感じるのかもしれないが、初音には嬉しいだけということはありうると思った。

それならば、なんと嬉しいことだろう。

でも、やはり喜んでばかりではいられない。

「樹莉様……。お願いです。高雄様に、お体を労ってくださいるようお話しただけま

せんか？」

初音は、顔の前で両手を合わせ、拝むように樹莉に願った。

「あらあら」

樹莉は目を丸くして、雪姫のほうへ視線を向けた。雪姫は「うむ」とうなずくと、樹莉に代わって初音に声をかけた。

「初音様は、本当に高雄様のお体を心配しておられるんじやの」

「もちろんです」

しみじみと言う雪姫に、初音は首をかしげた。

「もちろん、なあ。しかし高雄様は鬼神で、あやかしの統領なのじやぞ。あれだけの霊力があるのじや、体を壊すなどめったになかるうよ」

「少しくらい眠らなくても、高雄様なら大丈夫だと思いましてよ」

なだめるように、樹莉も雪姫も言う。侍女や近衛たちも、同じように言っていた。けれど。

「でも、いくら高雄様が強くても、体調を崩されることはあるのでしょうか？」

以前、雪姫から聞いた。鬼神も人とそう変わらないと。では、半月以上も寝台で眠っていない高雄の体には、大きな負担がかかっているのではないだろうか。

初音は、それが心配でならないのだ。自分のせいでは高雄が体調を崩すなんて、考え

たくもない。

初音が真剣に訴えると、ようやく雪姫と樹莉も真面目に受け取ってくれたようだった。

「そうですね。いくら高雄様が頑健でいらしても、こう毎日寝ているのか起きているのかわからないような生活をさせていては、お体を壊されることもありえない話ではないかもしれません」

「ううむ。幼いころから風邪ひとつ引いたことのない子じゃし、幻獣の討伐が重なって一週間や二週間野宿しても疲れひとつ見せないから、大丈夫とは思うのじやが」

「わたくしも、高雄様が体調を崩されたところなんて拝見したことがございませんの。正直なところ、想像もできませんわ。でも、初音様が心底、高雄様の体調をご心配なさっているのはわかりました」

樹莉はうなずいたが、けれど、と続けた。

「高雄様が初音様につきっきりになつてしまふのも、仕方がない氣もしますのよ」

樹莉が頬に手を当てて困り顔で言うのと、雪姫もしかりとうなずいた。

「初音様は、高雄様のお体を心配されるのと同じように、ご自身のお体を心配なさったほうがよいと思うぞ。こちらに来てからまだひと月ほどじやというのに、その間に何度お倒れになったのじや？ 計、三回じやな。それでは、高雄様がご心配なさるの

も無理はないというものじゃ」

雪姫が言うと、樹莉もうんうんとうなずいて、初音を見た。

「そ、それは……申し訳ないと思っております」

ふたりにじとっとした目で見られて、初音はしおしおと頭を下げた。

「申し訳ない、ではありませんわ」

「我らは謝罪を求めているのではない。初音様にも、高雄様にもお元気でいていただきたいのじゃ。初音様が、高雄様を心配なさっているようにな」

「初音様が倒れられたのは、大きな術を使われたり、無理をしてまで力を使おうと練習されている時ばかりでしょう？ お願いですから、ご無理をなさるのはやめてくださいね」

言われて、初音は目を伏せた。

高雄だけではない。雪姫にも、樹莉にも心配させているのだ。それは申し訳ないと思っている。だけど、素直に「無理しません」とは言えなかった。それどころか心のどこかで「やっぱり最初に倒れた時のことを話してしまったのは失敗だった」なんて考えている。

高雄と初音の婚約を祝う宴で、時を戻した時、大きすぎる術を使った初音は倒れてしまった。心配する高雄たちを見て、初音は以前にも同じように倒れたことがあった

ことを話してしまった。その時も翌朝には元気になった。

だから今回倒れたのも問題ない、すぐに元気になると言いたかった。けれど高雄たちは初音が倒れたのが二度目であることに驚き、ますます心配させてしまった。

高雄はますます過保護になり、初音が倒れたり、危険な目にあった時はどこにいても気づけるように「氣」を繋ぐことを懇願してきたので、了承してしまった。

さらにその後にも、自室にひとりである時つい呼吸法の練習をしすぎてしまい、倒れてしまったことにも気づかれ、それ以来、高雄の過保護が増している。

（あの時倒れてしまったのは、本当によくなかったわ……）

以来、高雄たちは初音が無理をしないと何度言っても聞いてくれなくなった。

焦りすぎている、と自分でも思っている。

もう倒れるような無茶はしないつもりだが、あれ以来、力が使えないのには焦りを感じる。

高雄のことも、雪姫たちのことも、信じている。知り合ってから時間はまだ短いけれど、彼らは初音がたとえこの先も大きな力を使えなくても、父や母や妹のように、初音を蔑んだりしないと理解している。それなのに、焦って、鍛練中に倒れて、高雄たちに心配をかけてしまっている。

「本当に無理をするつもりはないのです。宴で倒れてからは、うっかり力を使いすぎ

た一度しか倒れておりませんし……」

「初音様……」

「迷惑はかけてくれていいのじゃが、初音様が倒れてしまわれるのは困るんじや。危ないからの。せめて我らとご一緒の時なら、無理をなさる前にお止めできるから構わぬのじゃが」

実際、樹莉と訓練している時にも二度ほど倒れかけている。樹莉が止めてくれたから大丈夫だったが、ひとりなら確実に倒れていただろう。

「ごめんなさい……」

初音はうなだれた。

「私、あまえていますよね」

「初音様があまえているとは思いませんわ。どうしてそのようにお考えですの？」

不思議そうに問い返す樹莉の声に、初音はうつむいたままこくりとうなずいた。

「この間から、ずっと考えていたのです。これまで私は倒れたことなんてなかったのに、どうしてここでは何度も倒れてしまうのかと」

「それは……。初音様は、ここでは無理されているからではないですか？ 宴の際に倒れられたのは大きな力を使われたからでしょうし、その他の時も根をつめて鍛練なさっていたからでしょう？」

樹莉が言うと、雪姫は難しい顔で初音を見た。

「あるいは、ここでの生活が初音様にはお辛いつらいものであるか、じゃが」
「違います……！」

雪姫の声音が硬い。初音は、強く否定した。そして、顔を上げ、雪姫と視線を合わせて、言う。

「そうではないのです。むしろ真逆です。ここで倒れてしまうのは、倒れても大丈夫だと思っているからだと気づいたのです」

「どういうことじゃ？」

雪姫は、初音の顔を覗き込んで尋ねる。初音が無理をしているのならそれを見逃すまいと、ひとと見つめてくる雪姫の眼差しが痛いようで、初音はうつむきながら言った。

「私は、生まれ育った家では、大切にされていたとはいえませんが、体調を崩しても、誰かが心配してくれるなんて思っていなかった。具合が悪くても、助けてくれる人なんていなかった。だから体には人一倍気をつけていたんです」

母は初音に関わるうとしなかったし、父も用がある時しか初音の存在を思い出さないようだった。思い出された時には暴力や暴言がつきものだったので、思い出してほしいとは思わなかったが。

実家で初音に積極的に関わってくるのは妹の華代^{はなよ}だけだった。ただ、関わるについても、用を言いつけたり、暴力や暴言を振るったりするばかりだ。

初音の具合が悪くても、それは変わらない。一度、華代の目の前で倒れかけた時なんて、真冬だというのに水をかけられ、さらに具合が悪くなったこともあった。

あの家で倒れたら、下手をすると路上へ放り出されていたかもしれない。西園寺^{さいおんじ}の娘としていちおう女学校にも通っていたので、本当に家から放り出されることはないだろうけれど、そんな心配も頭からなくならない、そんな家だった。

だから初音は体調を崩したりしないように、いつもとても気を使っていた。

華代の無茶な命令のせいで倒れそうになることはあっても、自身がしたいことを無理に押し通して、そのせいで体調を崩すなんて考えられなかった。そんな贅沢^{さいたく}を自分ができるなんて、考えたこともなかった。

今、倒れるまで鍛練がしたいと思って、力を渴望しているからといってそれを実行してしまえるのは、高雄たちなら保護してくれると信じているからだ。

「ですから、こんなふうには倒れてしまうのは、私のあまえなのだと思うのです」

初音が言うと、樹莉はため息をついた。

「ずるいですわ、初音様。そんなふうにおっしゃっては、強くお諫め^{いさめ}しづらいではありませんか」

樹莉は、困り顔で初音を見る。そして、目が合った初音がぎこちなく微笑むと、もうひとつため息をついて、諦めたように言った。

「無理をなさるのはだめでしてよ。初音様が倒れたところをもう見たくないと思ってるのは、高雄様だけじゃないんですからね」

「そうじゃぞ。初音様が言いたいことを口にできるようになったのは嬉しい限りじゃし、したいことはしてほしい。じゃが、ことは初音様のお体にさわるでの」

「初音様が高雄様をご心配なさるのと同じですわ」

樹莉と雪姫、ふたりに言われ、初音はしおしおとうなずいた。

「はい、ありがとうございます。私も皆様に心配をおかけするのは本当に心苦しく思っているのです。もう倒れるような無茶はしなと思います……」

前に鍛練中に倒れた時も、倒れるまで無理をするつもりはなかったのだ。けれど。

一度は使えた力。あれが、また欲しかった。

時を戻すという大きな力を使えたのが、自分だけの成果だとは思わない。あれはあの白猫が助け導いてくれたからこそ使えた術で、自分の能力だけで制御できるもののだとは思えなかった。

けれど、それよりもっと小さな術なら、使えるかもしれないと思ったのだ。だって、時戻しの術を使った時、これまではなかった手ごたえが確かにあったから。

あと少しだけ。そう思って、訓練を繰り返して。けれど術が使えるようにはならなかった。

高雄が一緒に練習してくれる時は、それでも少しずつこちらの世界に自分の体が馴染んでいく感覚があり、確かに前に進んでいる気がした。樹莉と一緒に訓練でも、高雄とともに訓練する時よりは劣るにせよ、同じような感覚はあった。けれど、ひとりでの訓練は、あれ以来まったく効果がないことには気づいていた。

けれど、もしかするとあと少しでできるかもしれない、そういう気持ちが捨てきれなくて、つい無理をしてしまった。

……今なら、無理をして体調を崩しても、ひどく扱われることなどないと思えるから。これまででできなかった努力もできる、そうすればこれまでできなかったこともできるようにするのはないかと思ったのだ。

けれど初音のことを心配するあまり、高雄が自分の生活をおろそかにしていることに気づいて、初音もこのままではいけないと心底思った。

樹莉や雪姫に相談したのは、踏ん切りをつけるためだ。

「高雄様にご心配をかけないためにも、私はあまりひとりでは訓練しないようにしなくてはいいですね」

それは力を得ることを諦めることとは、別のことはずだ。初音は、そう自分に言

い聞かせる。

けれど口にするのと、また力を得ることから遠ざかる気がして、胸が痛んだ。

「初音様……」

樹莉は初音の内心を慮おもはんがつてか、悲しげに初音の名を呼びながら、雪姫を見た。雪姫は、そつと初音の肩に手を置いた。

「なにもそう思い詰めることはないだろう。このままの方法がうまくいかぬのなら、別の方法を試してみる頃合いなのじゃろ。初音様がかくりよに來られて、まだひと月も経っておらぬ。そう焦ることはないじゃろうに」

「……そうですね」

今の初音の周囲のあやかしたちは皆、優しい。初音が無能でも、責めたりしない。それなのに、初音はかつてないほどに靈力を得たいと思っていた。このかくりよで広く高雄の妻として認められるには、力の強さも必須だと思ってしまうから。

しおれた気持ちは隠しきれないのだろう。樹莉も慰めるように初音の肩に触れた。

「高雄様は、他のお願いならなんでも叶えるとおっしゃったのでしょうか？ でしたら、他のお願い事を考えてみませんか？」

「それもよいな。初音様、なにかしたいことや欲しいものはないのか？」

高雄は、他のお願い事なら聞いてやりたいとは言っていたが、なんでも叶えてやるとまでは言っていなかった、と初音は思う。

けれど期待のこもった目で樹莉と雪姫に見つめられて、そういえば、と先日から考えていたことを口にした。

「あの……、花葵様にお会いすることは可能でしょうか」

「花葵に？」

雪姫が、意外そうに目を丸くした。初音は、こくりとうなずく。

「皆様にお話ししたように、私が子猫の助力を得て時を戻す術を使う前、花葵様は統領の決定を声高に否定し、罪に問われました。私が時を戻したため、それはなかったことになりましたが、花葵様のお心が変わったわけではないと思うのです。ですから、このままでは、いつかまた同じことになるかもしれないと心配で……」

「なるほどのお」

雪姫は、意味ありげにうなずいた。

「それに、最後にお話しした時の花葵様は、それまでとは雰囲気違った気がするのです。それも気になっていて……」

倒れる直前、初音が子猫の指示で花葵に抱き着いてから、花葵はどことなく雰囲気違った気がした。もちろん意識も曖昧な時のことだ。ただの勘違いかもしれない。

けれど、どうしてもあの時の花葵の様子が気になった。

初音がそう訴えると、雪姫が「うむ」とうなずいた。

「我は、よいと思う。そろそろ初音様の気晴らしもかねて、いろいろなあやかしに会ってみられてはどうかとお伺いしようと思うておったしの」

「いろいろなあやかしに、ですか？」

「そうじゃ。宴のように多くの者に顔見せするものではなく、同じ年ごろの娘じやとか、お好きそうな商人じやとかを、ここに招いてはどうかと樹莉と相談しておったんじゃよ」

「初音様の体調もようやく落ち着いてくれたので、信用のおける商人だけでも呼んでみようかと考えていたのですわ」

樹莉はそう言って、初音を優しい目で見た。

「研鑽けんさんを重ねようとされる初音様はご立派ですけど、あまり考え込むのは体にも心にもよくありませんもの。それに、かくりよのことを知ることも霊力を発揮する訓練として有効ですし」

「書物などから体系的に学ぶだけではなく、実際のかくりよに親しんでもらおうという作戦なのじゃ。初音様がお会いになりたい相手が花葵というのは意外じゃったが……」

難しい顔で、雪姫が腕組みをしてうなる。幼げな顔立ちに似合わない仕草はかわいらしく、微笑ましくも見えたが、初音は真剣な顔で雪姫を見た。

「花葵様にお会いするのは、難しいでしょうか」

「どうかのお。あれも本来なら崔亮の孫娘で身元も明らかじゃし、初音様と同年代の同性ゆえ、招くのも問題ないじゃろうが、普段の言動が言動じゃからの」

「そもそも花葵は、高雄様のお相手に自分の姉の木蓮を強く推していましたから。早々に初音様と顔合わせできるのは、周囲に不思議に思われるでしょうね。けれどもちばんの問題は、高雄様ですわ」

言いづらそうに言葉を濁す雪姫をよそに、樹莉はきっぱりと言い放った。雪姫は苦笑いして、うなずく。

「初音様にはお話ししておらんかったが、初音様のお話を受けて、今も崔亮を通じて花葵を牽制したり、探りを入れたりはおろのじゃよ。今のところ気になる点はあるものの、目立った動きもないから監視しておるだけじゃがの。その監視も、公共の場での行動の記録を取っているだけで、犯罪者扱いではないから、わかることは限定されておるがの」

「表向きなものでもない花葵を糾弾すれば、非難されるのは高雄様や初音様ですから、高雄様の措置も穏当にならざるを得ませんの。ですが、高雄様は花葵に対して大

層ご立腹です。初音様が花葵に会いたいとおっしゃっても、却下されそうですわ」

樹莉は頬に手を当てて、困ったわため息をついた。

「そうじゃな。まあ花葵に関しては、初音様に敵意を抱いている可能性が高そうじゃし、我も初音様に会わせる気はなかったのじゃが」

雪姫は腕組みしたまま、初音の顔を見た。初音は「お願いします」と頭を下げる。

「初音様がお望みなら、お会いするくらいは大丈夫じゃないかしら。もちろん警戒を怠る気はありませんけど、花葵は霊力も弱いですし、武力はからきしですもの。初音様に危険が及ぶことはないと思います。けれども、花葵の言葉が、初音様のお心を傷つけるかもしれません。高雄様がご心配なさっているのも、たぶんそちらでしょうね」

「……大丈夫です」

自分に敵意を抱いているだろう相手と会うのは、怖くないわけじゃない。花葵のことだって、まったく怖くないといえば嘘になる。けれど初音は、花葵のことはなぜか本気で厭う気持ちになれなかった。

花葵を気にかけてしまうのは、自分と同じように無能と言われている彼女に、自分を重ねて勝手な同情をしているだけかもしれない。けれどたった数度の短い邂逅でしか知らぬけれど、花葵はいつもどこか悲しげに見えて、それも気になっていた。

このまま花葵に会わないまままでいて、花葵が再び罪を犯してしまったら、きっと後悔する。だから、会いたい。

初音は、静かに自分の気持ちを伝えた。すると、雪姫は小さくうなずいた。「初音様がそうおっしゃるのなら、場を設けるとするか。まずは高雄様に了承を得る必要があるの。なかなか難儀しそうじゃが」

「高雄様はなんだかんだと反対されるでしょうね。初音様をご心配なさってのことでしょけれど、理由のひとつはきっと、初音様をひとりじめしたいからだと思いますわ。わたくしも少しだけ同じ気持ちです」

樹莉は微笑みながら言う。冗談めかした言葉に、樹莉の本音が隠れているようで、初音は樹莉の緑の目を見つめて言う。

「花葵様のことは気になってますし、かくりよで高雄様の婚約者として認められるためにも、たくさんの方と知り合い、もっと親しい方を作ろうと思っています。けれど、たとえこの後たくさんの方と親しくなれたとしても、樹莉様や雪姫様、火焰様や湖苑様は、私にとってかけがえのない特別な存在です」

高雄とともにうつしよにやってきて、高雄の側近として初音のことを仲間のようになげってくれたこの四人は、初音にとって家族のような存在だった。中でも樹莉と雪姫は同じ女性という気安さもあり、ともに過ごす時間も長い。本当に特別な存在なのだ。

この先どんな出会いがあっても、ふたりが特別であることに変わりはないと思う。

そう言うと、雪姫と樹莉は嬉しそうに笑って、必ず高雄の許可を得て花葵との面会を取り付けると請け合ってくれた。

「そうと決まれば、作戦会議じゃ」

雪姫が楽しげに宣言する。初音は雪姫の先導で、樹莉と一緒に、内宮にある小さな図書室に向かうことになった。

同じ内宮にある図書室なのでそう距離はない。けれど廊下の大きな窓からは太陽の光が降り注ぎ、その光の中を歩いていると、なんととはなく穏やかなのんびりとした心地になる。

護衛の桃花と陽太、侍女の竹良も一緒の大所帯での移動だったが、初音と雪姫がそろって目の光を浴びてくつろいだ様子で歩いていたため、樹莉を含めた他のみんなは、ふたりの邪魔をしないように静かに歩いていた。

その時、遠くで高雄の声が聞こえた。

初音よりも先に気づいた樹莉と雪姫が立ち止まり、「あら」と顔を見合わせる。そして唇に人差し指を立てて「静かに」と初音に合図した。

初音がうなずくと、雪姫はにんまり笑って、曲がり角の向こうをこっそりと覗き、初音を呼び寄せる。

高雄は、初音が私室として使っている居間の前で、椿の花が生けられた花瓶を侍女に手渡しているところだった。

「これを初音の部屋に生けたのは、そなたか？ 悪いがこれは、すぐに外宮の部屋に持っていくように」

「かしこまりました。よろしければ、理由をお聞かせいただけますでしょうか。今後は同じことがないよう努めたく存じます」

侍女が持つ花瓶に生けられていたのは、大ぶりの赤い椿だった。花びらの鮮やかな赤、中央の雌蕊めしべの黄色、つややかに光る緑の葉。たっぷり花瓶に飾られた椿は、いきいきとした色の対比も美しく、初音の目にはどこにも問題はないように見えた。けれど高雄は眉をひそめ、うなずいた。

「先日、椿苑に行く途中で、初音を不快にさせることがあったのだ。椿を見れば、初音がそれを思い出すかもしれない。だからしばらくの間、椿の花は初音の目に入らぬようにするように」

「……かしこまりました」

侍女は、一瞬目を丸くした。が、すぐに表情を取り繕い、頭を下げた。そして、椿の入った花器を持って、しずしずと外宮へ歩いていく。

高雄は、その姿を満足そうに見送り、せわしなくその場から立ち去った。

「高雄様……」

高雄の姿が見えなくなると、初音はようやくその名を口にした。

「高雄様は今、元老の相談会の時間のはずじゃが。休憩時刻に、初音様の部屋に不備がないかを確認しに来ておったのじゃろうか」

「初音様がお部屋に戻られていればお会いできるかもしれないと、顔を出しに來られたのかもしれませんが。どちらにしても、休憩時間など短いですし、外宮からここまで来る時間も合わせれば、ほんの一瞬しかいられませんのに、それでもこちらに来てしまわれたのでしょうか。……わたくしたちがいることにお気づきにもならないなんて、相当お急ぎでしたのでしょうかね」

一部始終を目撃した樹莉と雪姫は、ぎゅつと胸元をつかんで高雄が行ったほうを見ている初音に、にんまりと笑いかけた。

「愛されていますわねえ、初音様」

「ほんにのう。少しの悲しみであっても、初音様から遠ざけたいのじゃろうな」

初音は顔が熱くなって、じんわりと額に汗がにじんでしまう。そっと両手で顔を覆おほうと、樹莉がくすくすと笑う声が聞こえた。

雪姫がくすりと笑う声も聞こえたが、雪姫はすぐに小さな声で尋ねてきた。

「初音様は、椿を見るのは辛いかえ？」

思いのほか真面目に尋ねられて、初音は慌てて顔を上げた。

「いいえ、そんなことはございません。椿苑に行く途中、花葵様にお会いした後は、少し気分が沈むことはございました。けれど今はまったく気にしておりません」

初音が元老のひとりである崔亮の孫娘の花葵に初めて声をかけられた時、花葵は「あなたみたいな女が高雄様に選ばれるなんて、誰も認めないわ!」と初音に言った。

その時は、初音も傷つかなかったわけではない。悲しかったし、憎しみに満ちた花葵の顔が怖かった。

その後も、内宮に入り込んできた洗濯場の下女たちが、同じようなことを言っていたのを聞いてしまったこともあり、追い詰められた気持ちになったこともあった。

けれど、高雄はもちろん、雪姫や樹莉たちもすぐに助けてくれて、寄り添ってくれたから、長く落ち込むこともなかった。

その後、立て続けにいろいろなことが起きたので、今ではあの時のことは、ほとんど忘れていた。

むろん、完全に忘れたわけでも、苦い気持ちがなくなったわけでもない。

けれど辛くとも、初音はもう高雄を諦めることなどできない。高雄本人に拒絶されたのならともかく、他者からなにを言われ、そのせいで傷つくことも、高雄への気持ちはもう揺らぐことはなかった。だから、この痛みは、初音が飼いならすべき痛みだ

ろう。

当時、初音は花葵に言われた言葉を隠していた。けれど、時を戻す術を使って倒れた後、話してしまった。高雄たちに起きたことを説明するには必要だったからだ。

けれどそれを聞いた高雄が、花葵に会ったのは椿苑に行く時だからと、椿の花を初音の目から隠そうとするなんて、思わなかった。

(そこまで守っていただかなくても、私は大丈夫なのに……)

高雄の目には、初音はどれほど頼りなく見えているのだろう。呆れた気持ちもないではないのに、それを凌駕するほど嬉しい。

初音は、雪姫と樹莉に微笑んで言った。

「椿苑に行く途中で花葵様と会ったことなど、今はもう気にしていません。それに私は、もともと椿の花は好きなのです」

初音が心から言ったのがわかるのだろう。雪姫はほっと胸を撫で下ろしてうなずいた。

「ならば、今度は高雄様と一緒に椿を見に行くがよい。このままでは、初音様はお好きな花をひとつ見られなくなってしまうかもしれないからね」

「まあ、雪姫様。いくらなんでも、大袈裟ですわ。高雄様だって、これからずっと私から椿の花を遠ざけるなんてことまではされませんでしょう」

高雄も、先ほど侍女に「しばらくの間は」と言っていた。この冬が終わるころには、忘れられる話だろう。

雪姫の大袈裟な言葉に、初音は笑う。けれど雪姫と樹莉は、そんな初音をからかうように笑った。

「さて、それはどうかの」

「初音様は、まだまだ高雄様の想いの重さをおわかりではないと思いますわ」
あまりにも自信たっぷりと言われて、初音は隣いた。

「そ、そうでしょうか……？」

戸惑いながら聞くと、雪姫と樹莉は大きくうなずく。初音はまた瞬きをし、少し考えた。

「ですが、高雄様と椿を見に行くのは楽しそうです」

雪姫がはじけるように笑うと、見守っていた侍女の竹良もこらえきれないように吹きだし、「失礼しました」と咳払いした。

「作戦会議などせずとも、初音様がお願ひすれば、花葵を呼ぶこともあつさりと許可が下りそうな気がしてきたの」

雪姫は茶化すように言いながらも、初音たちの先に立って、図書室に行く道に戻る。初音は樹莉と笑いながら、それに続いた。

「花葵に会いたい？」

全員そろっての昼食は、久しぶりだった。席に着くとさっそく、初音は高雄に願ひ出た。

高雄は手に持った皿を置き、む、と腕を組む。

「急な申し出だな。なにかあったのか？」

「いいえ。ですが、ずっと気になっていたのです。花葵様を、このままにしておいてはいけないのではないかと」

初音は、隣に座る高雄の顔が見やすいように座りなおして、真剣に訴えた。

高雄は顎に手を当て、む、とうなずく。

「そうだな。初音が時を戻してくれたおかげで、我々は花葵が愚かな真似をしたところを目撃していない。だが、宴の席で真つ向から初音に暴言を吐いたというなら、そのようなことが二度とできぬように対処すべきだと、俺は思っている」

「だーかーら。俺らは、初音様が大きな力を使われたことをわかっているし、おっしゃることが本当だろうと信じているけどよ。なんの証拠もないどころか、この世界線ではしなかったことで花葵を罰することはできねえんだよ」

苛立ちをこらえるように両手を握りしめる高雄の肩を、高雄の向こうに座っていた火焔がはたいた。

「わかつている。だから監視だけさせて、手出しはしていないだろう」

「監視させているのも、わりとギリギリだからな？ 理由を取り繕って崔亮の許可は得ているとはいえ、花葵が訴えてきたら逆に俺らのほうが非難されるかもしれないかな？」

火焔は高雄の肩をぎゅっとつかんで、なだめるように言う。

「高雄様、お怒りですわね」

樹莉は頬に手を当てて、ほうとため息をついた。

「まあ、初音様のこととなると我慢のきかない高雄様のことじゃ。初音様を罵倒した花葵に怒りを抱いているのは知っておったが、これほどあからさまとはの。よう取り繕っていたものじゃ」

「高雄様も、今の状況で花葵を罰するわけにはいかないことはわかってるんですよ。ですが、感情は抑えられないようで、花葵の話になるといつもこうなんです」

湖苑は、いつものことだとたんたんと言った。

「高雄様……」

花葵の「罪」のほとんどは、初音が時を戻したことで消えた。それを覚えているの

も、初音と、時を戻す術を助けてくれたあの白猫だけだ。高雄や雪姫たちは、初音が語ったことを信じてくれただけで、時が戻される前に起こったことを覚えているわけではない。大きな術を使った痕跡があったとはいえ、初音が語った「時を戻す」という出来事を高雄たちが疑いもせずに信じてくれて、初音は驚きながらもとても嬉しかった。

それに、花葵のことを調べてくれていることも、嬉しかった。

それは、初音の言うことを信じて花葵を警戒してくれているのと同時に、統領という重い立場にふさわしく、間違いがないよう慎重に動いてくれているのだとわかるから。

同時に、やはり花葵のあの時の言動を覚えている自分が、花葵に会って説得すべきだと思った。花葵にあのようなことを二度と起こさせないためには、花葵が初音のことを認めてくれるのがいちばんだと思うから。

このままにも動かなければ、花葵はいつかまた同じような行動をとるかもしれない。その前に花葵に会って、話をして、高雄の結婚相手として自分のことを認めてもらわなくてはいけない。あの時のことを覚えている自分なら、それができるかもしれない、と。

あの時の花葵は理性を吹き飛ばしたような状態だった。でもだからこそ、あの時の

言葉はきつと花葵の本当の気持ちだったと思うから。

「私は、花葵様にお会いするべきだと思うのです。公の場でないのなら、花葵様がなにをおっしゃっても、大きな問題にしないでいいでしょう？ あの時、花葵様の本当のお気持ちをうかがった私なら、きつと花葵様のお気持ちを動かすことができると思うのです」

初音は、高雄の目を見つめて、切々と訴えた。高雄はいつものように顔を赤らめることはなく、苦しげに眉を寄せて尋ねてきた。

「だが花葵は、初音のことを目の敵にしている。そなたにとつて、おらぬほうがよい存在だろう。なぜそこまで、手を差し伸べようとするんだ？」

初音のことを優しいと、高雄はいつも言う。そのたびに初音は、自分はそんなに優しい人間ではないのにと心の中で彼の言葉を否定してしまふ。高雄が見ているのは自分ではなく、理想化された別人なのではないかと、少しだけ疑う気持ちがあつたのだ。けれど、高雄は花葵に手を差し伸べようとする初音に「なぜ」と問うた。初音は嬉しくなった。優しい人間なら、誰もかれも救おうとするのが当たり前だろうに。

そう、初音は優しくなんてない。自分を害する相手は嫌いだし、助けようなんて思わない。高雄は、それを知っている。だからここで「なぜ」と訊くのだろう。

そういえば、初音を虐げていた妹の華代を高雄が消そうとしていたのを止めた時も、

高雄は同じように「なぜ」と言っていた、と初音は思い出した。あの時は、すぐに妹を消そうとする高雄に困惑していたので、そのことはいつの間にか忘れていた。あのころから、高雄は初音をそのままに受け止めてくれていたのだろうか。

初音は嬉しくなつて、高雄の手を取つた。そして手と手を合わせて、するりと指を絡める。

「ん、んん……？」

高雄が戸惑つたような声を漏らす。けれど嬉しくなつた初音は、そんな高雄の声にもそわそわして、絡めた指にぎゅっぎゅと力を込めた。

大きな、硬くて強そうな指。あたたかい手だ。初音のすべてを包み込んでくれるような、大きな手。

(好き)

胸の奥から、ぎゅつと気持ちが込み上げる。あまやかな話をしてたわけじゃないけれど、あふれる感情はどうしようもない。

もてあました気持ちのままに、初音はぎゅっぎゅと指を絡め、はあっと熱い息を吐いた。

(高雄様が好き)

初音が、花葵に手を差し伸べようとしているのには、いくつもの理由がある。

ひとつめは、初音が時を戻す前のように、花葵が公然の前で初音を選んだ高雄の選択を批判して処罰を受けることになれば、高雄が大切に思っている元老の崔亮まで処罰しなくてはいけなくなるから。そのことで高雄が傷つくだろうから。

ふたつめは、強い霊力を持つ姉と比べられ、無能と公言される花葵に、自身の境遇を重ね、同情しているから。

そして最後に、これは初音の勘でしかないのだが、花葵はきっと高雄のことが好きだからだ。切ない目で高雄を見る花葵を目の当たりにして、出会ったばかりの自分が高雄と結婚することに申し訳なさを感じた。花葵のような思いをしている娘が、このかくりよにたくさんいることを、今はもう知っている。初音の護衛としてこの場に控えている桃香も、たぶんそのひとりだ。けれど初音がいちばん初めに高雄への恋心を持つ娘として出会った花葵は、そんな娘たちの象徴のように初音には思えて、きちんと向き合いたいと思うってしまうのだ。

そんな花葵が、初音を高雄の相手として認めてくれたなら、きつとひとつ自信が得られるから。

(私は、どこまでも自分勝手だ)

身近な桃香ではなく、ただ初めて恋敵と感じただけの花葵を象徴に仕立てようというのも、本当に勝手だ。優しさとは、程遠い。初音自身だって、そんな自分のことを

好きだなんて胸を張って言えない。でもたぶん、高雄はそんな初音のことも知っている。それでも、初音のことを好きだと言ってくれているのだと思う。

(本当に、どうして高雄様は私なんかが好きなんだろう?)

初音は、高雄と出会ってから何度も抱いた疑問をまた胸に抱く。でも。

「高雄様。私は、私のために花葵に会いたいのです。ご許可いただけますか?」

どうしてかはわからないけれど、高雄は初音のことを好きになってくれた。深く、大きな愛で、初音を大切にしてくれる。

この幸運を大切にしたい。高雄が大切にしてくれる初音自身と、高雄たちを大切に思う自分の気持ちも一緒に。だから、ひとつひとつ。すべきだと思う行動を選び取り、重ねていこうと思うのだ。

初音が高雄の目を見上げて、熱っぽく言うと、高雄はぐつと唇を噛んでうなずいた。

「……初音が、どうしてもと言うのなら仕方あるまい」

「ありがとうございます!」

初音はぱっと顔を輝かせて、雪姫と樹莉のほうへ手を振った。ふたりは目を丸くして初音を見返したが、一瞬の後、笑顔で手を振り返してくれた。

ほつとして、初音は卓に置いていたお茶をひとくち飲んだ。

その隣で、高雄は顔を両手で覆って、ぐったりとうなだれる。

「振り回されてるなあ、統領」

火焰は、逆隣から高雄の顔を覗き込み、からかうように言う。

「なんとでもいえ。俺は幸せ者だ……」

うつむいたまま、高雄は返す。火焰はけらけらと笑い、ばんばんと高雄の背中を叩いた。

「まあ、このまま花葵の監視を続けていても進展なさそうだしな。手があるのなら、打つのもいいだろ。それが吉とでるか凶とでるかはわからねえけどな」

「初音さえ無事なら、多少のことはどうとでもするさ」

そう言って高雄は顔を上げ、切り替えるように小さく咳払いして、卓に並ぶ全員顔を見回した。

「では、話を詰めるか。まず絶対条件として、初音が内宮から出て、花葵に会うことは許可できぬ。強い結果で守られたここがいちばん安全な場所だからな」

「でしたら、内宮の応接室に席を設けましょう。表向きは、わたくしが初音様の無聊を慰めるため、親しくなれそうな方をお招きするとしてはどうでしょうか」

樹莉は、先ほど初音や雪姫と打ち合わせしていた話を切り出した。

「悪くはないが……、それで花葵を招くのは難しいのではないか？ 初音と親しくなれそうな女性は、他にいくらでもいるだろう」

「そうだな。花葵は表立って初音様に敵対しているわけじゃねえけど、自分の姉である木蓮を、高雄様のお相手にと推していたのは知られた話だしな。なんで花葵が早々に呼ばれるんだって疑問に思われそうだな」

高雄が首をかしげると、火焰も同意した。けれど湖苑は、「それが問題になるでしょうか？」と声を上げた。

「一般的な高位のあやかしに嫁ぐ娘であれば、まずはより格の高い方に顔を繋ぎ、相手の顔を立て、庇護を得るのは賢いやり方でしょう。しかし初音様は、統領である高雄様のお相手です。そのお立場は比類ないものです。高雄様の母である天零様や、元老の紫水とも既に顔を合わせられており、おふたりにも認められている初音様が、順序がどうのと外野から言われる筋合いはありません。あまり気を遣わずに済む、同じ年ごろの娘たちとの顔合わせから始めて、かくりよの社交に慣れていただくつもりだといえは、花葵を招いてもそう不自然ではないのでしょうか？」

湖苑の話を、高雄はうなずいた。けれどもおも思案顔で腕を組んだ。

「だが、樹莉は友人知人も多い。いくらでも初音に好意的で、素行がよい娘がいるだろうに、なぜ花葵なのかと言われそうだな」

「ですが、花葵だって崔亮の孫娘で身元は明らかですし、この御所城にもよく出入りしています。わたくしとも、幼いころから顔馴染みですもの。それほど不自然に思う

者はいないはずですわ」

樹莉は高雄に訴えた。

「まあ、花葵の他にも何名か呼べば紛れるじゃろ」

雪姫が樹莉に加勢する。

だが高雄は、それを聞いて顔をしかめた。

「他の者にも、初音を会わせるのか？」

「そう嫌そうな顔をするな。初音様はこれからもずっとかくりよで暮らしていかれるのじゃぞ。知人もろくにいないのではお寂しいじゃろう。まあ、初音様が興味を持たれそうな商人たちも紹介したいと思うておったんじゃ」

「商人を？」

高雄はますます嫌そうな顔をしたが、雪姫は一蹴した。

「心配せんでも、男の商人は呼ばぬ。安心しろ。今、我が呼ぼうと考えておるのは、楽粋館の牡丹^{うでぎん}じゃ。あやつは品行方正じゃし、性格も穏やかで争いごとを嫌っておる。初音様がお会いになっても嫌な思いをさせられることはないじゃろうし、花葵は幼いころ、あの家で育てられておった。花葵についても、いろいろと情報を持つておるかもしれないぬ。なにより、楽粋館で扱っている陶磁器は面白いからな。初音様にもお見せしたかったのじゃ。あとは、そうじゃな。樹莉がひいきにしておる季法堂^{きほうどう}の姉妹も呼

んでもよいのではないか？」

「楽粋館の牡丹と、季法堂の三姉妹か。あれなら、まあよいだろう」

雪姫の挙げた相手に心当たりがあつたようで、高雄は納得したようにうなずいた。

「それに、まあ、こちらとしては面白くないが、初音様が宴で倒れた時、花葵は目の前におつたからの。その謝罪もあつてと言えば、早々に花葵を呼んでも勘繰^{かんぐ}られることはないじゃろう」

雪姫が言うと、樹莉もうなずいた。

「そうですわね。起きたことを考えれば、初音様が謝罪なさるなんて話はしたくありませんけれど。宴の最中に花葵の前で倒れられたので、一言声をかけるのも通例ですから、そういうことにしておいてもよいですわね。花葵に妙な注目を集めるのは避けたいですもの」

樹莉が言うと、高雄も苦い顔でうなずく。すると火焰と雪姫が卓の上のお茶に手を伸ばした。

話は、ひと段落したのだろう。初音は、おずおずと切り出した。

「ところで、高雄様。お伺いしてもよろしいですか？」

初音が高雄のほうを向いて尋ねると、高雄はとろけるような笑みを浮かべた。

「もちろんだ」